

外傷（外邪性）と定めて  
鍼灸を施し  
奏功した急性腰痛 1 例

山田恵美 吉岡広記

日本鍼灸研究会 吉岡鍼灸院

# 目的

- ▶ 外傷（外邪性）と定めて鍼灸を施し  
奏功した急性腰痛1例を通じ  
病態把握の重要性について考察する

# 対象

- ▶ 年齢 : 35歳
- ▶ 性別 : 男性
- ▶ 仕事 : 自営業
- ▶ 特徴 : どこかひ弱で感情が顔に出やすい
- ▶ 肥瘦 : 瘦身
- ▶ 治療頻度 : 1週間に4~6回
- ▶ 脈證  
人迎気口診 : 虚燥痰燥の順  $\underline{K} > \overline{J}$  数  
(気口浮滑 > 人迎沈滑)
- 六部定位診 : 肺経虚證

# 症例 A 発症日時：X年4月初旬、14時頃

## ▶発症の経緯

- 数日前から気温が高く、薄着で過ごし、便の量が少なく腰部が黒ずむ
- 前夜は、特に暑く寒気がするほど湯冷めする
- 当日は、急に気温が下がり寒く、中腰にて洗顔中に発症

数日にわたって体を冷やしたうえに、当日の気温低下が加わり発症に至ったとみることができる

## ▶ 所見

- ・ 発症後、即座に直立不可
- ・ 1時間後には上体が右へ側彎、痛みが鋭く劇化
- ・ 動作時に痛む（後屈＞前屈）、歩行困難
- ・ 手足冷（足＞手）
- ・ しばしば小用を欲するも渋り、量も少ない
- ・ 便通無し
- ・ 人迎気口診：気虚寒湿の順  $\bar{K} > \bar{J}$  遅  
（気口沈滑＞人迎沈滑）
- ・ 六部定位診：肺経虚證

## ▶ 治法

脈證からは内傷と判断されるが・・・

- ・ 経緯：体を冷やした
- ・ 症状：急速な悪化（風）、後屈の方が痛む（陽）  
足冷が強い（冷）

以上の点より、**外傷（風證）**と定める

### 本治法

膀胱経の郄穴の瀉法

肺経の井穴と榮穴の補法

### 標治法

背面部の散鍼

證に基づく兪募穴への知熱灸

# 結果

$\bar{K} > \bar{J}$  遅



$\bar{K} > \bar{J}$  数

- ▶ 日頃に近い虚燥痰燥のやや逆となる  $\bar{K} > \bar{J}$  数  
(気口浮濇 > 人迎沈滑)
- ▶ 直後に大便 (軟、多) と小便 (白濁、多) が  
出て足冷が取れ、夜間痛も無く寝られた
- ▶ 毎日治療を重ね、痛みは日毎 (ほぼ発症時刻  
を境) に軽減し、3日目には鈍痛に変わり側彎も  
概ね戻り (前屈 > 後屈)、8日目に消失した

# 考察 1

## ▶ 発症後の脈状変化

① 日頃の数（燥）→遅（冷）

体表を冷やしたことが原因と判定される

② 日頃の陰虚（気口浮）→陽虚（気口沈）

冷により蔵気（内気）までが鬱し逆證\*に

転化したことが**発症の転機** \*瘦人は陰虚が順

## ▶ 軽度の冷えであれば陽虚には至らず・・・

軽) 虚劳虚寒  $\underline{K} > \underline{J}$  遅 : 風邪症状

重) 虚劳寒湿  $\underline{K} > \underline{J}$  遅 : 足冷、大小便不利  
軽い腰痛



## 考察 2

- ▶ 初回の治療後に日頃の陰虚に復して大小便が利した点  
陽虚の程度は軽く一時的である
- ▶ 痛みの消失に時間を要した点  
一過性の強い冷え（外因）による外形（形気）の損耗が主證である

# 結語

- ▶ 内傷の病を、外傷と判断して治法を組み立てたことが奏効したと考えられる
- ▶ 急性腰痛であっても、症状と脈状を勘案すべきことが示唆された